

伊勢半本店 紅ミュージアム



東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F TEL03-5467-3735

- 開館時間：午前11時～午後7時
- 休館日：毎週月曜日、展示替期間
- 入館料：無料
- 交通：東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車B1出口より徒歩12分／渋谷駅東口バスターミナル51番乗り場・都01系統に乗車「南青山7丁目」下車徒歩1分

江戸時代後期、かつては特権階級の習慣だった化粧が、広く庶民層にまで浸透します。化粧品の多品種・量産化が進み、商標・価格ともに多様な展開を見せたこの時期は、まさに化粧文化が花開いた時でした。

当時、化粧に使われた色の数はわずかに3つ、白粉の「白」、お歯黒・眉墨の「黒」、そして紅の「赤」のみでした。紅は紅花から抽出される赤い色料で、花弁中わずかに1%程度しか含まれていない大変貴重なものです。日本では、3世紀中頃に大陸から紅花が伝来して以来、この花弁を採集し、衣類の染料や化粧料(口紅) 書料(絵具)などを作ってきました。

その後、徐々に生産地が拡大していき、近世初頭に紅花の栽培は全国に普及、とりわけ山形県最上地方の紅花は品質が良く、主要生産地として発展します。生産地と需要先(紅花問屋や紅屋、染物屋など)との取引が活発化し、紅産業は江戸時代に最盛期を迎えました。

しかし明治・大正以降、化学染料や洋紅(洋風の口紅)の普及に伴い、紅の需要は染料・化粧料・書料すべての面で激減、店を畳まざるを得ない紅屋が続出するという事態に陥ります。

そうして今日、かつてのように紅を作り出せる紅屋は、伊勢半本店のみとなりました。現今唯一の紅屋と

なった当社が、紅の歴史や文化、そして何より技を残すべく創設した紅の資料館が「紅ミュージアム」です。

当社は、化粧文化が花開いたのと時を同じくする江戸後期の文政8年(1825)、日本橋小舟町に創業しました。以来、変わらぬ製法で紅を作り続けています。

そもそも紅屋にとって紅作りとは、代々口伝で受け継がれてきた、門外不出の秘伝の技です。そのため、紅屋によって作り出す紅の色味は必然異なってくるものでした。紅花から幾工程も経て、職人の手により抽出された純正な紅は、猪口や碗・小皿・貝殻などの内側に刷いた状態で販売されたのです。



良質な紅は玉虫色の輝きを放つ。これを水に浸した筆や指で溶くと、瞬時に鮮やかな赤へと変化する。紅は唇・頬に限らず、目元や爪先も彩った。



江戸時代後期の板紅(各種)
 上段:(左)菊文色絵鍍金板紅
 (中)枝柿文色絵鍍金板紅
 (右)鶴流水文色絵鍍金板紅
 下段:(左)秋葉散文色絵鍍金鏝形板紅
 (中)蝶文散色絵鍍金板紅
 (右)蝶文散色絵鍍金板紅

伊勢半本店創業当時の紅猪口と紅筆。



紅ミュージアムでは、紅作りの道具をはじめ、紅屋に伝わる仕入れ文書や引札、江戸後期に実際使用されていた数々の化粧道具、当時の化粧風俗を描いた浮世絵など、紅と化粧文化とに関連する資料を常設で展示しています。

江戸時代の化粧道具の中には、外出時に携行することを目的に作られた小振りな道具もあり、この紅入れにあたるものを、一般的に「板紅」と言いました。

板紅の大半は、四方5センチ程度の大きさで、形状はその名のとおり板状や箱状・二つ折りが主流を成します。素材に象牙や鼈甲・金属・木・紙などを使い、その表には古典や草花・吉祥文などをモチーフにした意匠が施されました。量産品もあれば、持ち主の趣向を凝らし、特別に誂えた一点物もあり、中には紅筆・白粉入れ・白粉刷毛などと組物で作られたものもあります。これらは、当時の女性が化粧品の容器にまで心を傾けていたことと同時に、そんな持ち主の意向を汲んで制作した職人の技に触れることのできる資料とも言えるでしょう。

今秋、当館では企画展「江戸の赤(仮題)」の開催を予定しております。江戸の人々の身を飾った魅惑的な赤色の数々をご堪能ください。



江戸時代後期の白粉刷毛(各種)…前列左の白粉刷毛は、板紅と組物で作られたもの。

※ 創業者である初代・澤田半右衛門は、日本橋通油町の紅白粉問屋で20数年の奉公の後、独立。その際、伊勢屋という呉服店から株を購入し、店名を「伊勢屋半右衛門」、屋号を「伊勢半」と称した。

ご案内

第5回企画展「江戸の赤(仮題)」

開催期間：2009年10月上旬～11月末

入館料：500円(予定)

企画展開催時のみ入館料をいただきます。

常設展期間は入館無料です。

協力：其角堂コレクション

企画展の詳細や、そのほか紅ミュージアム開催イベント・講演会などの情報は、下記ホームページをご覧ください。

<http://www.isehan.co.jp>